

トラブル続出にはワケがある

カラーコンタクトレンズ、 選び方と使用方法には 細心の注意を!

若い女性を中心として定着しつつあるカラーコンタクトレンズ(カラコン)。しかし、視力補正用で医療機器として国の認可を得て薬事法の規制を受けているものと、おしゃれ用で雑品として取り扱われているものがあり、おしゃれ用カラコンの使用によるトラブルがあとを断たないという。ここでは、どうしてそんなトラブルが続出するのか、またどうしたらトラブルを避けることができるのか、専門家に意見を聞いた。

おしゃれ用カラコンの使用により生じた眼障害

障害件数	程度障害の件数	後遺症の可能性		入院の必要性	
		あり	なし	あり	なし
167件 (100%)	重傷 21件 (13%)	あり	13件 (8%)	あり	3件(2%)
		なし	8件 (5%)	なし	10件(6%)
	軽傷 146件 (87%)	あり	6件 (3%)	あり	0件(0%)
		なし	140件 (84%)	あり	6件(3%)
				なし	139件(83%)

報告された眼障害は、多くは黒目(角膜)の表面に傷がつき炎症が起こる角膜炎などだが、なかにはその傷から細菌感染を起こす角膜潰瘍という重篤な症例も報告されている。症状により入院や後遺症の可能性、時には失明の危険性もあるだけに、専門家の指導にもとづいた選び方や正しい使い方を守ることが必要だ。

障害件数	原因区分	件数(%)	眼障害の原因		件数(%)
167件 (100%)	使用方法	88件(53%)	手入れ不良	42件(25%)	
			長時間装着	16件(10%)	
			使用方法を理解していない	16件(10%)	
			装着したまま就寝	7件(4%)	
			無理な装着	6件(3%)	
	品質	28件(17%)	品質が悪い 着色剤はげ落ち・漏出	21件(13%) 7件(4%)	
不明	51件(30%)	不明	51件(30%)		

眼障害を引き起こす原因の多くは、誤ったお手入れ方法、障害を引き起こす前に、専門家の指示をあおいだり、使用上の注意をよく読んで、適切なケアをすることが重要だ。また、医療機器として認可を受けた商品を購入することも心がけたい。



カラーコンタクトレンズ

独立行政法人 製品評価技術機構・視力補正を目的としないカラーコンタクトレンズに関する調査報告書より抜粋
製品評価技術機構(NITE)が社団法人日本眼科医会会員12,877人にアンケートを送付し、実施した眼障害調査。眼科医145人からの報告による186件の眼障害事例に基づき作成。そのうち167件がおしゃれ用カラコンの使用により生じている。(平成17年10月3日から平成20年2月26日までの診察によるもの)

使い方によっては 角膜炎や角膜潰瘍も

カラコンの普及にともなつて、使用によるトラブルもよく耳にするようになった昨今。「製品評価技術機構(NITE)の眼科医への聞き取り調査でも、2005年10月から2008年2月までに、167件の被害報告があったという。症状では、黒目(角膜)に傷がつき炎症をおこす角膜炎や、角膜の一部が薄く擦りむけたような状態になる角膜びらん、その傷から細菌感染を起こす角膜潰瘍などがあり、そのなかでも重傷の人は決して少なくない。目の健康のためにも、カラコンの正しい選び方や使い方を覚えておくことが大切だ。

細胞毒性や色素溶出も確認 言語道断な使い方

私どもでは、カラコンを使用して眼障害が起きたという事例が多数報告されていることを受け、2005年に医療機器ではないおしゃれ用カラコンの安全性や品質などを調査しました。そのときは、合計10銘柄をテスト対象としたのですが、結果は驚くべきものでした。2銘柄で、眼粘膜刺激が起きうる程度の細胞毒性を確認。さらに4銘柄で色素の溶出が認められ、うち2銘柄では溶出液が蛍光を発していることが認められました。こういった安全性が認められないものを目のなかに長時間入れて使用することは、

トラブルの原因になることも十分考えられます。

しかも最近のメディアのなかには、アクセサリ感覚でカラコンの使い方を紹介しているものもあるのです。色がちょっと濃いなと思ったら裏返しにして付けてみるといいよ」「2枚重ねもお勧め」など、嘩然とするような内容でした。こんな使い方は、言語道断です。きちんとした規制ができるまでは、視力補正を目的としないカラコンの使用は控えること。また、誤った使い方は絶対にしないことが重要だと思います。

眼科専門医の指導を受け 適切な使い方



ウエダ眼科院長 医学博士
植田喜一さん
山口大学医学部卒業。下関市にウエダ眼科を開院。山口大学医学部臨床准教授。日本眼科医会常任理事としてコンタクトレンズの問題に携わる。医学博士。

ADVICE
「カラコンの長時間装着やケア不足など、誤った使い方は眼障害の原因に」

私のクリニクにも、カラコンの装用によって眼障害を起こした患者が時々来られます。眼科専門医(専門医)の検査を受けずに雑貨店でカラコンを買い、不適切に使った結果、ひどい黒目の障害を起こしている方もいます。カラコンの長時間装用やケア不足など、誤った使い方が原因のケースが多いですね。視力補正を目的としない度数なしのカラコンは、医療機器の認可を受けていないものもあり、これらはディスプレイやインターネットで購入することができます。その場合、専門医の診察を

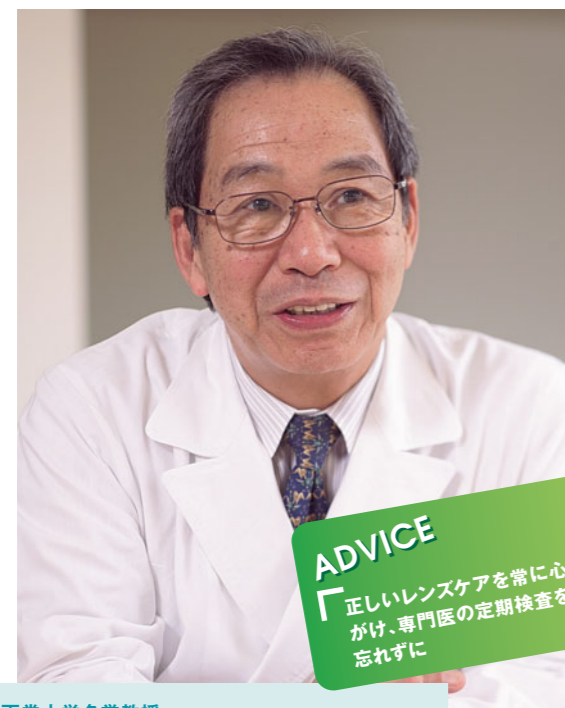
うけていないため目に合っていないものを装用していることが多いです。取扱方法やケアの方法についての指導や、装用に当たっての注意などの説明を受けずに使用した結果、トラブルを引き起こしてしまう患者が増えています。もちろん、品質そのものにもかなり問題があるカラコンを使用している患者も少なくありません。専門医の診察を受け、日本で認可を受けたものを処方してもらい、正しく装用するということは、大切な目のためにもしっかりと守っていただきたいですね。

元来は医療用に用いられる ものだという認識を

度数のないカラコンも、もともとは医療用に限られていました。先天的に虹彩に色がない人や、外傷などで虹彩が欠損してしまった人などは、光が多く眼内に入ってしまうために、カラコンを用いて光量を適切にコントロールするのです。ですから度数の必要がなくても、元来はきちんとした専門医の指示が必要なのです。コンタクトレンズは、医療機器のなかで高度管理医療機器に入ります。股関節を骨折したときなどに用いられる人工骨頭やペースメーカーもこの分類に含まれることを考えれば、

ば、コンタクトレンズがいかに医療機器として重要か、想像できるでしょう。つまり、それだけきちんと扱わなければならないものなのです。目のなかに入れることを考えれば、度数のないおしゃれ用のカラコンも例外ではありません。トラブルを防ぐためには、「医療機器として認可を受けたものをなるべく対面で購入すること」「専門医の定期検査を受けること」の2点は守っていただきたいですね。最後は使う人の自己責任。もちろん、売り手のモラルも私は聞きたいと思っています。

ADVICE
「正しいレンズケアを常に心がけ、専門医の定期検査を忘れずに」



順天堂大学名誉教授
金井 淳さん
順天堂大学大学院卒業。順天堂大学名誉教授。コンタクトレンズに関する講演や著書も多い。医学博士。